

「前と後の辺を考察する第十一章」

プトガラ（人）が本性として有る理由を否定する＞論証する理由を否定する＞生死の行為が有る理由を否定する＞

[章の著述を説く]

ここに言う。「我はまさしく有る。（何故ならば）輪廻が有る故である。もし我が有ることにならなければ、五衆生の輪廻を行き来する本質として、生死を一つ一つ連ねて、何が輪廻するとなろうか。世尊も、

『比丘達よ。生と老死の輪廻とは、始まりと終わりが無い。無知の障碍¹を具え、執着の結縛²を持ち、継続によって縛られた執着の羊である有情が輪廻し走り回る、彼らの前（始まり）の果ては頭かではない。』

と説かれた。世尊によって示されたので輪廻が有る時、輪廻する者も有るが、それをも『我』という。」

章の著述を説く＞輪廻が本性として有ることを否定する＞[輪廻において、始まりと終わりとの中間の部分否定する]

述べよう。もし、輪廻そのものが有れば、我も有るとなろうが、有るのではない。このように、

前の果ては頭かであるかと問うた時、
偉大なる成就者は、「そうではない。」と説かれた。
輪廻は始まりと果てが無く、
それに前は無く、後は無い。 1

「果て」と「部分」と「一部」等は、異音同義語である。「前の果て」とは、「前の部分」という意味である。

もし、「輪廻」という何かの有るならば、壺等の如く、それには必ず前時と後時も有るとなるが、有るのではない。世尊も

「比丘達よ。生と老死の輪廻とは、始まりと終わりが無い。」

と説かれた。何故ならば、そのように、輪廻は始まりと終わりが無いと説かれた故に、「輪廻そのものは、有るのではない。」と、世尊が明らかに説かれたのではないか？それ故に、前と後の果てが認識されていない故に、「輪廻は無く、旋回する火輪の如くである。」というように留まる。

ここで、これを分析しよう。もし、世尊が輪廻の前と、後を否定したならば、

¹ 障碍しょうげ：覆い、妨げるもの。解脱や仏智を得る障害。

² 結縛けつばく：煩惱。その力によって輪廻より離れようとせず、善業を為さず悪業に勤しむので、苦しみに結び縛り付ける。（参考『蔵漢大辞典』）

如何様に

「比丘達よ。然れば、『輪廻を滅尽する為に注意深くあれ』と思い、君は
そのように学びたまえ。」

という言葉が説かれたのか？といえは。

述べよう。

「無知の障碍を具える有情」等の特徴を掲示して、それらのみの輪廻は始まりと終わりが無いと了解するが、真如の智慧の風力によって、無知の障碍の樹木を引き抜いた者達にとってはそうではなく、出世間道の火によって、煩惱の樹木を残らず燃やした彼らには、まさしく果てが有るのだ。」と知りたまえ。

また、「如何様に、始まりから離れた諸々に終わりが有ると示されたのか」といえは。

外界の穀物等に始まりは無いけれど、火等と接触したことより終わりが有ることは、まさしく見られることである。斯くも聖提婆が、

「斯くも、種子に果てを見て、それに始まりが有るのではないように、
その如く因が揃わない故に、生も起こるとはならない。」³

と説かれた。

終わりを示したそれも、輪廻の牢獄に縛り付けられた有情達を喜ばせる為に、世間人の名称に従い、世間人の知覚に対応してなされたのである。事物を思惟するのであれば、輪廻そのものが無ければ、それ故に、滅尽するようなことが何処に有ろうか。

ここで言う。「世間人の知覚に対応して、終わりのように、始まりも何故説かれていないのか。」といえは。

述べる。無因の過失となる背理になる故に、世間人の知覚に対応しても輪廻の始まりは無い。それ故に、「双方のようであろうと、まさしく始まりは無い。」と知りたまえ。

ここで言う。「もしまた、輪廻に始まりと終わりの二つが有るのではないとしても、そう見ても、否定していない故に中間は有るのである。それ故に輪廻は有る。(何故ならば) 中間が有る故である。ここで、有るのではないものにおいては、中間は無い。例えば、亀の毛の衣の如くである。」

³ 「斯くも…ならない。」:『四百論』第 8 章 25 偈。

君は、嘲笑されてよい者であり、

始まりと終わりが無いもの。
それに、中間が何処に有ろうか。

ではないか？「始まり」とは、「開始」や「前」や「第一（最初）」という。「終わり」とは、「果て」や「末」や「継続が切れる」としたまえ。

『始まりと終わりを否定したその輪廻に、中間が有ると何処でなろうか。それ故に、輪廻とは虚空のように、始まりと終わりと中間と離れる故に、名称だけのものに尽きる。（例えば）火輪の如くである。』と御考えになられた。

輪廻が無い故に、我も有るのではない。

輪廻が本性として有ることを否定する>生死において、前後時と同時（一緒）を否定する> [要約して示す]

「何故ならば、そのように、輪廻に始まりと終わりと中間が無いまさしくそれ故に、輪廻は無いので、生と老死等に前後や一緒（同時）の順序も、まさしく有るのではない。」と説かれた。

それ故に、それに前後か、
一緒である順序は不合理である。 2

生死において、前後時と同時（一緒）を否定する>詳細に説く>前後時制を否定する> [生が前であることを否定する]

如何様に不合理であるのかを示す為に、

もし、生が前となり、
老死が後であるならば、
生には老死が無く、
死んでおらずとも生まれることになる。 3

と説かれた。もし生が前となったならば、その時老死と離れるとなるが、老等と離れることは適わない。（何故ならば）無為そのものである背理となる故である。老死と離れた事物に生が有ると考えるならば、祭祀は他（の生）で死んでおらずにここに最初に生まれると考えることになる。それ故に、輪廻に始まりが有ることになり、無因である過失にもなるだろう。「我は過去時に現れたのだ。」と、そのように以前の果てについて考察することにもならず、以前現れたとなっていない状態より、後にここに生まれるともなるだろう。

『仮に、マンゴー等は以前に老死と関係無くとも最初のみを生じると見られる—その如く我もである。』と思えば。

そのようではない。 (何故ならば) 論証される命題と等しい故である。マンゴー等も、自らの種子が滅したとなれば生じる故に、他で失壊していないものが生じるのではないので、これは前述と等しい。

『何? 種子とは木よりまさしく他であり、それ故に木の生は、他で失壊していないことが、まさしく経過している。』と思えば。

そのようなものではない。 (何故ならば) 因と果はまさしく他であると成立していない故である。斯くも、

「何かに依拠して何かが起こる。それは先ず、まさしくそれではない。

それは他でもなく、それ故に断滅ではなく、恒常ではない。」⁴

と説かれるだろう。それ故に、種子より木は他そのものではなく、然ればこれは論証される命題に等しいのである。何故ならば、他において死んでおらずにここに生が有るのでもない故に、生が前であると承認するものではない。

前後時制を否定する> [老死が前であることを否定する]

もし、老死が前で生が後であるならば、そう見るとしても、

もし、生が後となり、
老死が前であるならば、
生の無い老死は、
無因であると、如何様になろうか。 4

「生の縁によって老死」といわれるので、世尊が、老死はまさしく生である因縁を持つと説かれたけれど、もしこれが前であるならば、その時因が無くなることになる。それ故に、これは正しくない。斯くも、

「土塊を持ち上げれば、持ち上げたことに因は有るけれど、持ち上げたことに見る因より他に、落ちることに (因は) まさしく無い。」

と説かれたことも、斯様に持ち上げたことのみが落下の因であるが、他ではな

⁴ 「何か…ではない。」: 『根本中論』第 18 章 10 偈。「何かに依拠して何かが起こる。それは先ず、まさしくそれではない。それより他でもない故に、それ故に断滅ではなく、恒常ではない。」

いが如く、ここでも生のみが壊の因そのものであると言ひ、他ではない。それ故に、まさしく無因の壊は有るのではない。

ここで、まさしく生の因縁であることによって、大（基本構成要素）のみが壊の因である故に、

『そのようにそれらの有為の法（現象）は、因と共に起こり、生じて壊れるものである。これは諸法の本性である。』

というこの偈も、善く引用されたとなるだろう。

詳細に説く＞ [同時を否定する]

ここで、生と老死はまさしく一緒にも起こらないと示す為、

生と老死は、
一緒であるとは適わない。
生じつつあるものが死ぬこととなり、
双方とも無因を持つものになるだろう。 5

と説かれ、もし生と老死がまさしく一緒であるとなれば、その時生じつつあるものが死ぬことになるが、これは正しくない。(何故ならば) 闇と光のように互いに反する故に、まさしく同一時であるとは正しくもなく、「まさしく生じつつあるものが死ぬ。」というようなものは、世間にも見られない。

他にも、生等が一緒に起こると考えれば、まさしく無因となるだろう。一緒にある黄牛の左右の角は、まさしく互いが因であると見られるのでもないので、これは正しくない。

生死において、前後時と同時（一緒）を否定する＞ [まとめ]

それ故に、そのように、

それに、前後と一緒という
それらの順序があり得ない、
その生とその老死を、
何故に概念化するのか。 6

生であるものと老死であるものに、前と後と一緒（同時）のそれらの順序が無い、その生が認識されていないならば、聖者方は何故に概念化しようか。「何故に」という言葉は、「あり得ない」に当て、「まさしく概念化をなさらない。」

という意味である。

その老死も認識されていなければ、何故に概念化しようか。『清浄をありのままにまさしくご覧になる故である。』とお考えになられた。

または、そのように生等有るのでなければ、幼子達は有るのではないその生と、有るのではないその老死を、何故に概念化しようか。それ故に、『幼子達による概念化（の対象）は、まさしく有るのではない事物である。』というお考えである。

章の著述を説く > [その正理を他にも適用する]

「輪廻に前の果ては有るのではないが如く、他の諸事物も（同様）である。」と説かれた。

輪廻のみに、前の果てが
有るのではないだけでなく、
因果そのものや、
性相と事相そのものや、 7

感受作用と感受者そのものや、
意味のある何ものでもよいが、
まさしく一切の諸事物においても、
前の果ては有るのではない。 8

そこでもし、因が前で果が後になれば、果の無い因は無因となるだろう。あるいは果が前で因が後であれば、そう見ても因より前の果は、まさしく無因となるだろう。もし、因果が同一時であるとなれば、そう見ても双方とも無因となるだろう。その如く性相と事相や、感受作用と感受者等にも当てはめたまえ。

輪廻についての説明が、因果等を説明したと知らせるだけではない。他にも他の事物である知と所知や、量と所量や、論証命題と論証するもの（理由）や、支分と支分を持つものや、性質と性質を持つもの等、それらについても「前の果て（が有ること）は正しくない。」と当てはめたまえ。

生死の行為が有る理由を否定する > [了義の教証と合わせる]

まさしくそれ故に、『聖宝雲経』より、

「法輪を回したことで、本来より寂靜であり、生じていない、本性は涅槃である諸法を、守護者である貴方が示された。」

と、聖者除盖障大菩薩が世尊を賞賛したのである。

その如く、

「本来より空であり、未来の（来ていない）法は、過ぎたことは無く、留まること無く、留まることより離れている。幻の本性であり常に精髓は無い。一切は澄んで清浄であり虚空の如くである。良く示され、それも尽きない勝者の法によって、見られない—この法は先より無我であり、有情は無い。それらを良く示しても、尽きるとはならない。名付けられたのみと考察して示されたのである。

輪廻に終わりは見付からず、前に起こった果てには性相（定義）が無い。未来時においても（そのように）知られる故に、能作（行為の対象）と行為はそのように関与したこととなり、良と下等にも起こることになる。

諸法（現象）等は常に愚かで本性が欠如する。一切は無我であるとも知りたまえ。」

等が説かれる。

生死の行為が有る理由を否定する > [章の名を示す]

阿闍梨月称の御口より綴られた頭句より、「前と後の果てを考察する」という第十一章の解説である。